大学教育とボランティア活動の展望と課題ー被災地支援が問うもの

ボランティアセンター長　平野　方紹

1. 大学ボランティア活動の原点から学ぶー大学とボランティアー

大学におけるボランティア活動の始源の一つに「セツルメント settlement」があります。これは 19 世紀末から顕在化した都市部のスラム問題を背景にして、「知識と人格を備えた人」がスラム街に「移住 settlement 」し、貧困者との人格的接触を通じて、彼らを「啓蒙」することで地域の福祉向上を図ろうというものでイギリス、アメリカで始まりました。当然、この主旨から、少なくない大学生がこの活動に身を投じました。当初は、素朴な善意とはいえ、いわば「上から目線」で始められた活動でしたが、そのメンバーは下層社会の現実に触れる中で、地域の住民を「変える」ことだけではなく、彼らから現実を学び、彼らと共に歩むことの大切さに気付きます。そして貧困などの生活問題を生み出す社会をより良いものにする社会改良の取り組みを始めます。特にアメリカ・シカゴのセツルメントで活躍したJ.アダムスは、その後ニューディール期に連邦児童・家庭局長として児童家庭福祉の推進や女性の地位向上に貢献し、その活動は女性として初めてノーベル平和賞を受賞するなど高く評価されました。

このセツルメントから学ぶべきことは、現実から学ぶことで「知」は社会に有益なものとなり、社会そのものさえ変える力になる、また、今日的見地から言えば、地域や地域住民と「共生」することの意義を示したことにあると言えます。そして、その原点が、支援を求める誰かを思いやる気持ちであること、「人を思う想像力」であるということです。

今日、大学は社会から遊離した「閉ざされた」学問の府ではなく、社会とともにあり、その進歩に寄与するものとしての役割が期待されています。そして、「Pro Deo et Patria」すなわち「真理を探究し、共に生きる」という本学の建学の精神もここにあります。「知」を社会に活かす、そのため現実から学び、人々とともに歩む、この大学ボランティア活動の原点は、このセツルメントから 1 世紀以上を経た今でも変わってはいません。同様に、本学のボランティア活動のルーツのひとつは、ポール・ラッシュ博士が 1927 年に BSA(The Brotherhood of St.Andrew、聖アンデレ同胞会)を設立したところにあり、その精神は現在のボランティアセンターの活動に引き継がれていることは言うまでもありません。

こんにち、科学が高度に進歩して「知」が多くの人々の現実から乖離している現在の学問をめぐる状況や、社会システムが高度化・複雑化した中で、人々が分断され孤立化している社会状況を考えるとき、「人を思う想像力」を高め、ともに歩む「知」としての大学の役割は、その重要性を増していると言えます。

2. 東日本大震災が私たちに問うものは何か

2011 年 3 月 11 日、日本は未曾有の地震・津波そして原発事故により約 2 万人の尊い命を失うなどの甚大な人的・物的被害が東北3県を中心に広範な地域

に及びました。立教大学は東日本大震災復興支援本部を設置、本学とかねてから交流のある陸前高田市への学生ボランティアの派遣に際してボランティアセンターは、学生の引率はもとより事前研修・事後研修を担ってまいりました。この東日本大震災から2年半が過ぎようとしていますが、未だ復興は道半ばにあると言えます。もちろん、生活環境をはじめとする社会インフラを復旧することは重要ですが、たとえ物的には原状回復したとしても、それで失われた命、失われた歴史と時間、失われた希望が戻るわけではありません。残念ですが、命、歴史、時間は取り戻せません。しかし、希望は多くの人々の力で取り戻すことが出来ます。

たとえ遠く離れていても、大きなことができなくても、その根底にある人を思う気持ちが人を支え、励ましてくれることの大事さが明らかになったのもこの被災地支援での活動からでした。そして、この「人を思う気持ち」「痛みを抱える人に寄り添う気持ち」が日本の社会全体に深く浸透して、定着することが、本当の意味での復興に問われているのではないでしょうか。

失われた命は戻りませんが、その命とそれを悼む遺族、友人、同僚の皆さんの痛みを思い、分かち合うことが、この日本社会に求められているといえるでしょう。

ボランティア活動の原点にある「人を思う想像力」、これは決して19世紀末のセツルメントの歴史的遺産ではなく、この復興の課題からも明らかなとおり、今を生きる私たちに問われています。そして、これからの未来を担う学生たちにとって、その未来をどう担うかの羅針盤となるものでしょう。

ボランティアは、その「人を思う想像力」を起動力として、一歩、現実の取り組みに歩み出すことといえます。そしてその歩みの中で、「人を思う想像力」は検証され、豊かになります。

視覚・聴覚・言語に重度の障害を抱えながら、その人生を主体的に切り開き、さまざまな困難に呻吟する多くの人々を励ましたアメリカの社会活動家ヘレン・ケラーは、大学生たちに期待する言葉を求められ、こう語っています。

あなたの心の灯火（ともしび）を、今少し高く掲げてください。その灯火で、私たちの歩む道を照らしてください。

東日本大震災による停電で被災地は漆黒の闇に覆われました。そのときの灯りがどれほど頼もしく、嬉しいものだったかと語ってくれた被災者がいました。闇が深いほど、小さな灯りでも大きな役割を果たしてくれます。明るい太陽の下ではあることするわからないような灯りでも、闇の中では、その存在は輝きます。

大学ボランティアセンターの役割は、学生たちの心の中にある、それは時として潜在化しその存在を本人が自覚していないこともある、灯火を育み、その歩みの支援を通じて、知と社会に貢献することにあると言えるでしょう。

この崇高な理念からすれば、まだまだ微力ではありますが、立教大学ボランティアセンターは、学生たちと共に明日の社会を創っている、という矜持をもって活動に取り組んでおりますことをご理解いただければ望外の喜びです。